

## 【研究活動報告】

2016 年度学内共同研究「トランスナショナルな日本文化理解教育に関する実践的研究  
～日本とフィリピンの大学生をケースとして～」実施報告

小ヶ谷千穂<sup>1</sup>

本研究は、「日本文化」を学ぶフィリピンの学生と、「日本文化」を理解し外国語（特に英語）で発信したい本学学生との間での交流プログラムを開発し、トランスナショナルな文脈の中での「日本文化」の構築のされ方について検討し、さらに日本の学生にとっての海外の学生との交流の意義について検討することを目的として立案された、フェリス女学院大学 2016 年度学内共同研究である。



コミュニケーション基礎ゼミとフィリピン大学生

---

<sup>1</sup>本共同研究は、以下のメンバーから構成された。小ヶ谷千穂（研究代表・筆者）・梅崎透（本学文学部英語英米文学科教授）・渡辺信二（本学文学部英語英米文学科教授）・吉田弥生（本学文学部日本語日本文学科教授）・高橋京子（本学文学部コミュニケーション学科准教授）・矢野久美子（本学国際交流学部教授）・横山正樹（本学国際交流学部教授）・ジーナ・ウマリ（フィリピン大学ディリマン校国際研究センター准教授）・梅若猶彦（静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科教授・能楽師）・福田安典（日本女子大学文学部日本文学科教授）。なお、本報告の文責はすべて小ヶ谷にある。

## 1. 研究の目的

今日、日本の学生たちが「グローバル人材」として期待され、海外留学を推進する動きも活発であるが、実際に海外留学を経験する学生たちは、留学先で「日本文化」について、英語を中心とした外国語で発信し、時にはそれを紹介することを求められる。しかしながら、海外志向の強い学生は、往々にして日本の「伝統文化」に関する知識や理解が十分でないことも多く、むしろ海外で「日本文化」を再発見する、という体験を持つことがしばしばである。同時に海外では、特に本研究の対象となるフィリピンのような東南アジア諸国において若者の間での日本の伝統文化への関心が高まっている。本研究は、日本の「伝統文化」とされる分野の中でも、特に「能」と「文楽」に焦点を当てて当該分野の教育に関して斬新な取り組みを展開しているフィリピン大学国際センター（Center for International Studies, University of the Philippines, Diliman. 2016年7月フェリス女学院大学と協定締結）および関連する諸大学（日本女子大学、静岡文化芸術大学）の研究者と学生、およびフェリス女学院大学の教員と学生との間で研究・交流活動を実践することを目的とした。具体的には、2016年11月にフィリピン大学から学生5名および教員3名を本学に招聘し、そこで本学学生との交流プログラムを実施した。学生交流プログラムの実施にあたっては、学科横断的なプログラムを編成し、また多文化共生コミュニケーション学会の協力を得て、学生主体の交流活動も実施することができた。

こうしたプログラム準備と実施のプロセスにおいて見えてきた課題と可能性を、文化研究・多文化コミュニケーション研究・国際社会学といったアプローチから考察していくことが本研究の目的である。なお、本研究は、その学際的な特質を鑑み、コミュニケーション学科のみならず日本語日本文学科、英語英米文学科、国際交流学科など複数の領域の研究者による共同研究として実施した。

本研究は、「日本の伝統文化」を学ぶ海外の学生とそれを指導する教員と、日本で日本文化や異文化・多文化コミュニケーションに関心を持つ学生とそれを指導する教員との間の交流活動を実践し、それによって、「伝統」文化を、ナショナリズムの発露のツールなどに矮小化することなく、グローバルにインクルーシヴなもの、として新たに提起できるのではないかと、という問題意識に支えられている。これは、単に日本文化の海外への発信能力を鍛えるというだけでなく、日本の学生たちが日本の「伝統」文化を、トランスナショナルな人的交流経験の中から、いわば「逆照射」的に学ぶ、ということも意味している。

こうした問題意識にもとづく本研究においては、①今日における「伝統」「文化」といった概念を、トランスナショナルな文脈の中でとらえなおす、という理論的成果に加えて、②日本の学生にとっては、日本文化を学ぶフィリピンの学生と英語で議論し交流するという実践的能力を高め、③フィリピンの学生にとっては、来日して短期のプログラムに参加することで、日本文化についてより理解を深めることができる、というより実践的な効果も期待される。②、③の実践的な効果の評価・分析を通して、①の理論的研究がさらに実

証性を持って実現されることになる。このように本研究は、研究面・教育面双方の有機的な連関によって成立するものである。

## 2. 問題意識

グローバリゼーションの時代、と呼ばれる今日において「文化」の位置づけはきわめて論争的であると言える。たとえば、デイヴィッド・ヘルドらは、グローバリゼーションをめぐる議論において、文化的グローバリゼーションを「均質化」「特殊化」そして「混淆化」の3つの方向性に同時的に向かうものであると予測した<sup>2</sup>。また、人類学者のアパデュライは、今日の文化のあり様について、「フロー(flow)」という概念を提示し、さらにその具体的な次元を5つのスケープ(ethnoscapes, mediascapes, technoscapes, financerscapes, ideoscapes)から把握しようとした<sup>3</sup>。

本研究では、上述したように、「伝統」や「文化」を固定視するのではなく、ましてやグローバリゼーションの中での偏狭なナショナリズムの発露とすることはもちろんなく、むしろトランスナショナルな人の移動や人的交流の活発化など、人のフローの実践を通してよりインクルーシブな「共同知」として構築されうるものとしての解釈可能性を探求した。その際に重視したのは、本研究の実践フィールドとしての日本とフィリピンの大学生の交流活動において、それぞれが互いの文化を紹介し合う（日本の学生が日本文化を、フィリピンの学生がフィリピン文化を、それぞれカタログ的に紹介する）といういわゆる一般的な「文化交流」ではなく、フィリピンの学生が「日本文化」を学んでおり、その学びを日本の学生に提示することを通じて日本の学生が、いわばトランスナショナルな文脈を経由する形で「日本文化」にあらためて触れていく、という相互作用のプロセスである。共同研究者の一人である梅若猶彦はこのことを、「逆照射」と表現した<sup>4</sup>。

同時に、プラクティカルな課題として、日本の大学生による実践的な「英語」力についての問題意識があった。今日、いわゆる「英語圏」で話される英語に加えて、「World English」「Global English」と呼ばれるような、英語を必ずしも第一言語としない人間同士の英語によるコミュニケーションの機会の増大と、そのための「多様な英語」への対応能力が重視されている<sup>5</sup>。多文化共生、あるいは多文化コミュニケーションといった視点からも、こうした「多様な英語」と早い時期に出会っておくことが、まさに、英語を「手段」として用いて、さまざまな背景を持った世界の人々と交流や共同作業を行うという、プラクティカルな社会的ニーズに対応していくことと考えられる。しかしながら、コミュニケーション

<sup>2</sup> Held, David eds., 2000, *A Globalizing World?: Culture, Economics, Politics*, Routledge(=中谷義和監訳, 2002, 『グローバル化とは何か—文化・政治・経済』法律文化社。)

<sup>3</sup> Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press.

<sup>4</sup> フィリピン大学・静岡文化芸術大学・日本女子大学連携事業「国際化の視座からの日本研究」シンポジウム@日本女子大学。2015年12月5日。

<sup>5</sup> 木村廣多・若杉祥太 2014「これからの英語教育に関する考察：グローバルイングリッシュの存在をふまえて」日本教育情報学会『年会論文集』(30), 142-143.

学科における教育においても、必ずしもこうした実践をカリキュラム内で実現することが十全にはできていない、という課題を抱えていた。本研究は、こうした新しいスタイルの多文化コミュニケーションのあり方を、大学という場を通して模索するものでもある。

### 3. フェリス女学院での交流活動の内容

2016年11月12日～15日までのフィリピン大学学生および教員の来学にあたっては、予算の関係上実質3日間の滞在日程であったにも関わらず、交流授業3つ、合同ゼミ1つ、学生交流企画1つを実施することができ、参加した本学学生は延べ104名に上った。具体的には、以下の授業で具体的な交流活動を行った。

- ① コミュニケーション学科「コミュニケーション基礎ゼミ」（担当教員：小ヶ谷千穂）での交流授業：学生による、フェリス女学院大学およびフィリピン大学ディマン校それぞれの学校紹介と質疑応答。フィリピン大学学生による文楽のパフォーマンス。
- ② 英語英米文学科「英米文化基礎ゼミ」（担当教員：渡辺信二）での交流授業：学生生活についてのグループディスカッション。英単語しりとりゲーム。
- ③ 英語英米文学科専門科目「テキスト生成と批評 B」（担当教員：渡辺信二）での交流授業：フィリピン大学学生による創作文楽についての解説とパフォーマンス、質疑応答。本学学生による詩の朗読と合唱。
- ④ コミュニケーション学科専門ゼミ（担当教員：小ヶ谷千穂）および英語英米文学専門ゼミ（担当教員：梅崎透）とフィリピン大学国際研究センター学生との合同ゼミ（テーマ：日比両国のメディアにおける「日本／フィリピン」の表象、および日・米・比の歴史的関係について）
- ⑤ 多文化共生コミュニケーション学会との「多文化・食文化交流」イベント：フィリピン料理アドボと日本の手巻き寿司を参加者で調理&試食。  
（会場は横浜市中区の貸しスペースを利用）



英語英米文学科基礎ゼミでの英単語しりとり

参加学生からのフィードバックもおおむね良好で、今後の同様のプログラムの継続を強く望む声も多かった。本学学生による英語での受信・発信能力の向上および異文化交流体験の向上において、一定程度の成果を上げたことができたと考える。以下は、上記プログラムに参加した本学学生からのコメントである。

「フィリピンの学生と話す中で、外国の方がこんなに日本について興味を持ち勉強して考えてくれているのだということに驚き、うれしかった。また、専門ゼミで日本のテレビ番組における外国人表象について調べていたのだが、今までは日本の学生だけで日本の番組を分析してきたので、実際に表象される側の人の意見を聞くことができ、今後考えていく上での手がかりを得ることができ、海外の学生と議論することでたくさんの考えを得ることができると思った。英語で発表をしたり議論することに対して、不安や負担感があったが、実際にやってみると思った以上に会話することができたので、これからも機会があれば参加したいと思った。」（コミュニケーション学科 3 年）

「フィリピンの学生の勉学に対する意識の高さに驚かされた。自国だけではとても得られない外から日本を見る視点など、貴重な意見を聞くことができて、とても刺激になった」（コミュニケーション学科 3 年）

「UP 生（＝フィリピン大学学生）の文楽パフォーマンスやその土台となった詩、フィリピンの文化や歴史に関する質疑応答に時間を割けたので、大変有意義だった。来年もこのような機会があればぜひ参加したい。ただ、たった 1 コマでは物足りないのも、もっこの先も交友関係が続くような、学びあえるような時間を増やしてほしい。」

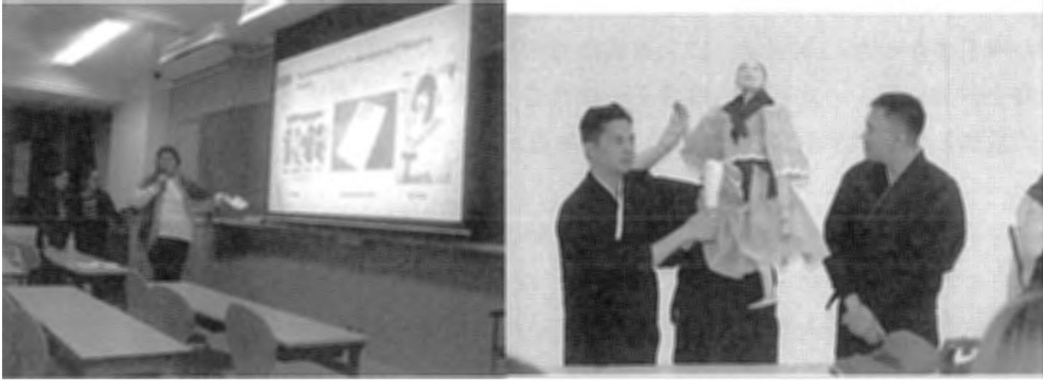
（英語英米文学科 3 年）

「UP の学生の文楽からフィリピンの文化を少し知ることができたのではないと思う。」

（英語英米文学科 1 年）

「UP の学生たちはとにかく積極性が素晴らしかったと強く思う。私たちが質問を投げかけると丁寧に答えてくれる上に、皆、『私も答えたい』『私の思っていること、自分の意見を伝えたい』という思いが伝わってきて、非常に感銘を受けた。」（英語英米文学科 4 年）

なお、交流活動の詳細については、本学ホームページにおいて、①『フェリスと私』コーナーに「フィリピン大学ディリマン校とフェリスの学生による研究・交流活動」として記事を執筆（2016 年 11 月 30 日掲載）、また②『フェリス・ブログ』にて「フィリピン大学との交流会を行いました」（2017 年 1 月 26 日掲載）記事として詳細な内容報告を行い、②のブログ記事についてはコミュニケーション学科の学生の執筆協力を得た。



学生によるプレゼンテーション

フィリピン大学学生による創作文楽人形の解説

#### 4. 交流・研究活動の成果

上述したように本研究は、「日本文化」を学びたいフィリピンの学生と、「日本文化」を理解し外国語（特に英語）で発信したい本学学生との間での交流プログラムを開発し、トランスナショナルな文脈の中での「日本文化」の構築のされ方について検討することを目的とした。

「伝統」「文化」といった概念をトランスナショナルな文脈の中でとらえなおす、という理論的成果に加えて、日本の学生にとっては日本文化を学ぶフィリピンの学生と英語で議論し交流するという実践的能力を高め、フィリピンの学生にとっては、来日して短期のプログラムに参加することで、日本文化についてより理解を深めるという3つの目的を掲げた。当該分野の教育に関して斬新な取り組みを展開しているフィリピン大学国際センターおよび日本女子大学、静岡文化芸術大学の研究者と学生、およびフェリス女学院の教員と学生との間で研究・交流活動を実践した。プログラム準備と実施のプロセスにおいて見えてきた課題と可能性を文化研究・異文化コミュニケーション研究・国際社会学といったアプローチから考察することに加えて、本学学生の英語によるコミュニケーション能力の向上と多文化交流経験の蓄積による包括的な国際性の向上が課題として明らかになったことを踏まえて、今後のカリキュラム改革における海外連携の重要性について、新たな知見を得ることにつながった。

本研究の成果・効果は以下の3点にまとめられる。

##### ① 教育面での成果・効果

本研究は、何よりもフィリピン大学で「日本文化」を学ぶ学生と、異文化・多文化交流および実践を学ぶ本学学生が、英語を使って共通のテーマにもとづき学習や交流活動を実践する、という活動に主眼を置いてきた。2016年11月のフィリピン大学学生および教員の来学にあたっては、予算の関係上実質3日間の滞在日程であったにもかかわらず、合同ゼ

ミ4つ（コミュニケーション学科および英文学科）、学生交流企画1つを実施することができ、参加した本学学生は延べ104名に上った。参加学生からのフィードバックもおおむね良好で、今後の同様のプログラムの継続を強く望む声も多かった。本学学生による英語での受信・発信能力の向上および異文化交流体験の向上において、一定程度の成果を上げたことができたと考える。また、前節で紹介したコメントにもあるように、フィリピン大学学生の、議論における積極的な態度や、日本側学生の英語力に対する寛容な態度に刺激や感銘を受けた学生が多く、研究立案時に想定していた「多文化コミュニケーション」や「トランスナショナルな日本文化理解」に加えて、より広い学習面での刺激や、コミュニケーション・スキルについての発見が、とりわけ日本の学生側にあったことが明らかになった。なお、共同研究メンバーの間でも、今後の展開について建設的な議論を、ミニ・ワークショップにおいて行うことができた。

## ② 理論面での成果

本研究における理論的課題は、今日における「伝統」「文化」といった概念を、トランスナショナルな文脈の中でとらえなおす、という点にあった。本研究で得られた知見にもとづいて、研究代表者である小ヶ谷が2016年12月15-16日に5th Bi-Annual International Conference of the Japanese Studies Association of Southeast Asia (JSA-ASEAN)（開催地：フィリピン・セブ市）において、「Meaning of Cultural Understating in the Era of Globalization: Learning from Philippine-Japan Student Exchange Program」と題した研究報告を行い、「“伝統文化”がトランスナショナルに包括的になりうる」という論点を提示した。また、SNSの発達などを通して物理的な移動や接触を伴わない形での文化交流が活発化する中でも、対面的関係における多文化交流が学生にとって、多様な動機づけを生み出す契機となる、という点についても、とりわけ「日本研究の国際化」が進展する中では重要であることを論じた。本報告については、会議参加者から多くの関心が寄せられ、特に日本とフィリピンの間での学生交流と、相互の文化交流のさらなる拡大を期待する声が多かった。なお、同会議では学外共同研究者である、ウマリ、梅若、福田の3名もそれぞれ研究発表を行っている。

## ③ 大学教育改革面（カリキュラム内容および海外連携）での効果

本研究の計画時には予想していなかった成果としては、本研究の成果を踏まえて、新たに大学教育改革面でのプログラム展開への着想を得たことが挙げられる。本学学生の英語によるコミュニケーション能力の向上と異文化交流経験の蓄積による包括的な国際性の向上、という課題をより実践的にプログラム化していくために、2017年度には横浜国立大学と連携してJASSOの「海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）」における大学コンソーシアム型プログラム「パラダイムシフト時代の脱国境化現象を考える」に申請・採択され、2017年度にはフィリピン大学およびサント・トーマス大学（所在地マニラ。東南アジア最古の私立大学）との学生交流プログラムを実施する運びとなった。なお、当該プログラムの運営にあたっては2017年度のフェリス女学院大学「大学教育改革プロジェクト」支援制

度に申請し、採択されている。また、今回は主に文学部を中心にした交流活動となったが、2017年度には新たに国際交流学部においても交流授業を行うことができたほか、コミュニケーション学科での身体コミュニケーション分野の教員の協力も得ることができ、教員同士の学術・研究交流の可能性も拡大することができた。今後は、本研究の成果を踏まえて、具体的なカリキュラムへの海外協定校との学生交流プログラムの反映について、共同研究のメンバーとともに検討していく予定である。

## 5. 今後の課題と展望

本学においては初めての試みであったフィリピン大学との交流活動については、関係した学生・教員からはおおむね肯定的な意見を得ることができ、また今後につながるさまざまな可能性を模索することができたと考える。しかしながら、今後同様のプログラムを体系化していくにあたっての課題を最後に確認しておきたい。まず第一に、事前準備期間の十分な確保についてである。この点については、参加した学生から「もっと準備時間が欲しかった」との意見が多数寄せられ、トランスナショナルな研究・交流活動を展開していくうえでは避けられないさまざまな予定・日程の変化や不測の事態の発生への対応などについて、特にそうした経験のあまり多くない日本の学生に対して十分に事情を説明し、フレキシブルな対応力についてもトレーニングしておく必要があることが確認された。今回のように教員主導ではなく、今後学生も運営側に巻き込んだプログラムを展開するうえでは、重要な課題と言える。第二には、第一の点とも関連するが、こうした交流プログラムを既存のカリキュラムとどのように体系的に連動させていくか、という点である。既存のカリキュラムの中に今回のようなプログラムを位置付けることができれば、事前準備における学生の負担感も軽減することができるし、同時に準備そのものに十分に時間をかけて交流活動そのものをより豊かにしていくことができると考えられる。この点については、2017年度の「大学教育改革プロジェクト」の中で、さらに議論を深めていきたいと考える。また、今後はフィリピン大学にとどまらず、複数の協定校を巻き込んでいく形で、より学生にとって魅力的な交流プログラムを計画していきたいとも考えている。ただ依然として、フィリピン大学学生との交流においては、本学学生との基礎的な英語力や、ディスカッションの経験値などに差があることは事実であり、今後本学において総合的な異文化・多文化コミュニケーションの経験を積み重ねられるようなプログラムを、学部・学科横断的に構築していく必要があることも、最後に指摘しておきたい。